



作家

李錦玉
リクム オキ

トッパ

わたしの生地は大阪。生まれると同時に二つの言葉の海をただよっている。

喃語（※1）は大阪言葉。それとも母語。当然記憶にあるはずもない。鮮明に記憶にきざまれているのは、音ではなく情景である。連子窓の格子を両の手でしっかりと握って、体を左右前後に動かすと、外の景色が揺れ動くのが、快く面白くていつまでも同じ動作をくりかえしていたのをおぼえている。何歳ぐらいだったろうか。二歳か三歳か——不思議な思い出である。その後わが家は大阪を後にする。初めて目にした母国は、ぼたん雪の降りしきる夜だった。その地での日常は当然母語なのだが、その当時のことは、さっぱりおぼえていない。でも「トッパ」という言葉は何十年たっても忘れなかった。忘れるどころか「トッパ」のことをますます知りたくなる。トッパは母方の親戚の男の子で三歳ぐらい上らしかった。おんぶをしてみたり手をつないでくれたり、ころんで大泣きしていると「ぼくの手は葉だ、ぼくの手は葉だ」と、痛いところに手をかざして呪文をとなえてくれるやさしい存在であった。わたしは長い間この「トッパ」を名前だと思っていた。心の中で「トッパ」と親しみをこめて、その名を折にふれてそつと思いついていた。それは幼時の母国の思い出でもあった。

十数年前、思いがけないソウル行きの話がもち上がった。短い日程を割いて両親の故郷——木浦の南の海に浮かぶ珍島（チンド）をたずねた。タクシーを走らせて探しあてた母の実家に立ち寄って話した。農業を手びろく営んでいるようだった。父の家は絶えていた。後で戸籍を送ってほしいと頼んで、物足りない気持ちを残してそこを去った。

日本に帰って数日後、珍島から電話が来た。受話器をとると「クムオギかい」と低い男の声。「そうです」と反射的に答えながら、「あつトッパだ、トッパはオッパ（※2）だったんだ」と頭の中でひらめいてわたしは胸が熱くなった。



※1 乳児の、まだ言葉にならない発声。

※2 女性や子どもが、年上の男性に親しみを込めて使う呼び名。

1929年、大阪生まれ。詩の創作、朝鮮の民話の再話や現代文学作品の翻訳等で活躍。みみずくの会、タバスコ（少年詩）、バオバブに所属。著書に『さんねん峠』『へらない稲たば』（ともに岩崎書店）、「いちど消えたものは」（てらいんく）などがある。小学校『国語』教科書（3年下）掲載作品「三年とうげ」作者。